

発掘速報展 2015 展示解説パネル集

だざいふ くらつかさ だざいふ かんぜおんじ 特別史跡大宰府跡・蔵司地区 太宰府市観世音寺

主な遺跡の時代：奈良～平安時代

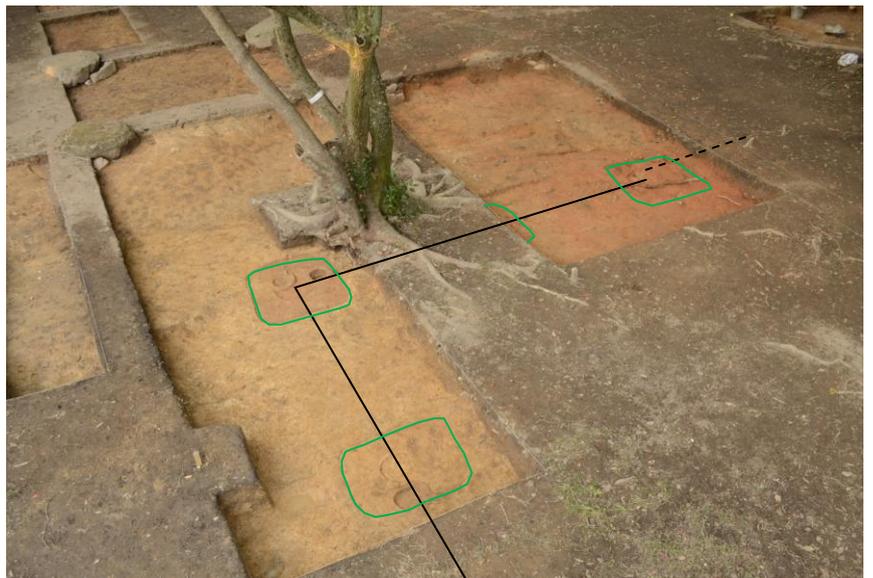
遺跡の概要：大宰府は、西海道諸国の統治や対外交渉などを担う地方最大の官衙（役所）で、「遠の朝廷」とも呼ばれました。中心となる政庁の周辺には、大宰府の諸機能を司る官衙群が置かれました。政庁西側の丘陵には、「蔵司」の地名や礎石群があることから、大宰府の財源を管理する「蔵司」が存在し、倉庫群があったと考えられてきましたが、実態は不明なままでした。そこで、当館では蔵司地区の解明に向けた発掘調査を実施してきました。

蔵司地区には政庁正殿を上回る規模の礎石建物跡 SB5000 が見つかっていいますが、調査により南北に廂を持つ二面廂建物であることが判明しました。また、その南側に礎石建物跡より古い時期の掘立柱建物跡が見つかり、蔵司地区の展開を考える上で重要な成果を得ることができました。

（学芸調査室 下原幸裕）



調査中の礎石建物 SB5000（南東から）



新たに見つかった掘立柱建物（南から）

古代大宰府「蔵司」の姿は…

みずき 特別史跡水城跡

だざいふ みずき おおのじょう しもおおり
太宰府市水城・大野城市下大利

主な遺跡の時代：飛鳥～平安時代

遺跡の内容：『日本書紀』によれば664年に築造された、古代の大宰府を護る防衛施設です。福岡平野が最も狭くなる場所に約1.2kmの長大な土塁を築いて平野を遮断し、土塁前面（博多側）の外濠に水を貯えた巨大な城壁でした。昭和28年（1953）に国の特別史跡に指定されています。

今から約100年前の大正2年（1913）、現在のJR鹿児島本線拡幅の際、東京帝国大学の黒板勝美・九州帝国大学の中山平次郎両氏によって、切通し部の土塁断面の調査が行われました。今回、この切通し部の整備に伴い、100年ぶりに再調査を実施しました。

土塁の積土には、山や台地を削り出した土や、河川周辺に堆積した川砂や粘土等を使用しており、土質の異なる土をうまく選択しながら高さ10m程度の土塁を築いたことが分かります。また土塁最下層付近では、枝葉を敷いて積土の基礎強化を行った「敷粗朶」を確認しました。出土した葉には、築造当時の緑色を残すものもありました。

（文化財保護課 杉原敏之）



巨大な城壁の築造技術

しもいらはらたかぎじんじゃ

下伊良原高木神社跡遺跡（縄文時代早・前期）

みやこ さいがわしもいらはら
京都郡みやこ町犀川下伊良原



神社の下から、鮮やかなオレンジ色の土が見つかりました。鹿児島県かいもんだけ開聞岳と屋久島の中間付近にあるきかい鬼界カルデラが、今から約7300年前に噴出したアカホヤ火山灰です。縄文時代の時期区分である「早期」から「前期」に移り変わる頃のことです。

遺跡の南側には特に20~30cmの厚さで純粋な火山灰層が残っていました。

アカホヤ火山灰の混ざった黄色系の土を掘り下げていくと、こぶし拳大前後の川原石がまとまった状態で数箇所現れました。よく見ると赤くあるいは黒く変色したり、割れたものがあるのがあって火を受けたようです。石を熱して、食物の調理に使用したもので、ここで縄文人がキャンプをしていたことを物語っています。写真上のオレンジ色の土はアカホヤ火山灰です。



土層の堆積を観察するために幅1mのトレンチを開けたところ、縄文時代の局部磨製石斧2点が重なって出土しました。出土した層は自然に堆積したものと思われ、ヒトが意図的に置いた状況ではないようですが、「狭いトレンチから2本の石斧が重なって出土するって、超ラッキー!」。今回の調査で出土した石斧はこの2点だけでした。

(参事 飛野博文)

7300年前、鹿児島発の火山灰

主な遺跡の時代：古墳時代

古墳の内容：古墳時代後期（6世紀後半）の築造で、墳丘径 13m（外周溝の外端で 33m）の円墳であり、二重周溝をもちます。内部主体は複室構造の横穴式石室です。古墳からは耳環、単鳳環頭大刀、馬具、鉄鍬、須恵器坏、高坏、猪や鹿の小像が付随する装飾付須恵器が出土しています。この古墳の最も特徴的な点としては、内部主体の石材に同心円文、円文、三角文、三角文を意識した X 字状文などが赤色で描かれていることです。現在、京都平野では、彩色を施す装飾古墳は発見されていません。そのため、この貴重な古墳は今後、県の指定文化財になる予定で、東九州自動車道みやこ豊津インター近くの高速道路の橋梁下に現在も保存されています。

展示の馬具は、前室右袖石背面から出土した雲珠と馬具の塊です。雲珠は中央に八花形座金具と宝珠形の飾 鉾が付き、脚部は花卉形で、1ヶ所無くなっていますが、10脚になります。それぞれの脚には3点の鉾と貴金具が付き、またこの雲珠は所々に銀箔が残っています。馬具の塊は全て鉄製で、引手金具2対（4点）、鏡板1対（2点）、鍔鞘1点、U字形金具2点、辻金具1点が塊となって錆着しています。

（文化財調査室 坂本真一）



京都平野初の彩色を施す装飾古墳

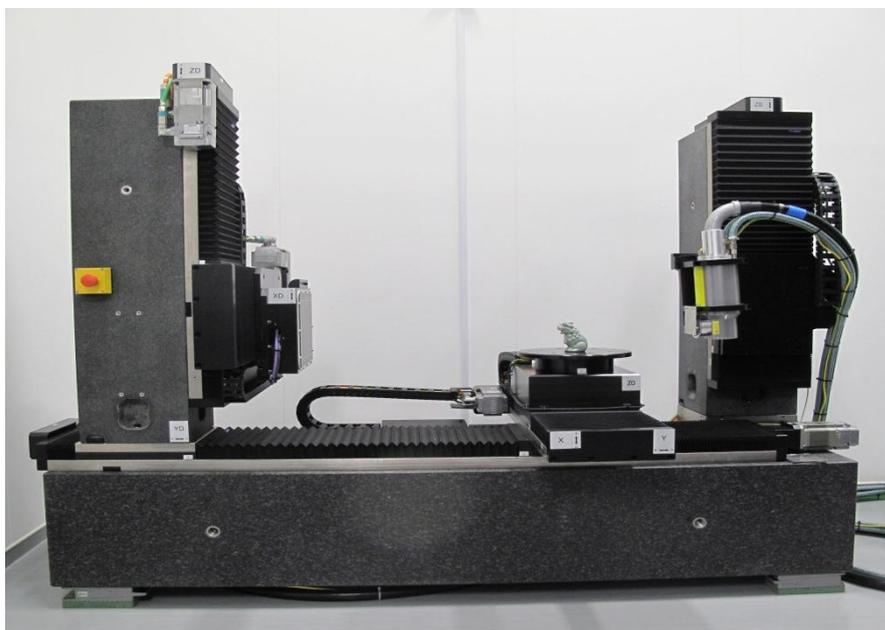
X線 CT スキャナの調査成果①

あざみ
皆見大塚古墳

X線 CT スキャナの概要：

九州歴史資料館では、2010年11月に文化財の内部構造調査を目的とした文化財用 X線 CT スキャナ（コンピュータ断層撮影装置）を導入しました。文化財用の CT スキャナは、県立博物館施設では当館が全国初の導入となりました。

当館の X線 CT スキャナシステムは、測定対象を考古資料や彫刻等の美術工芸品のうち小型の資料に限定し、これらを高精密に調査することを目的にした性能を備えています。



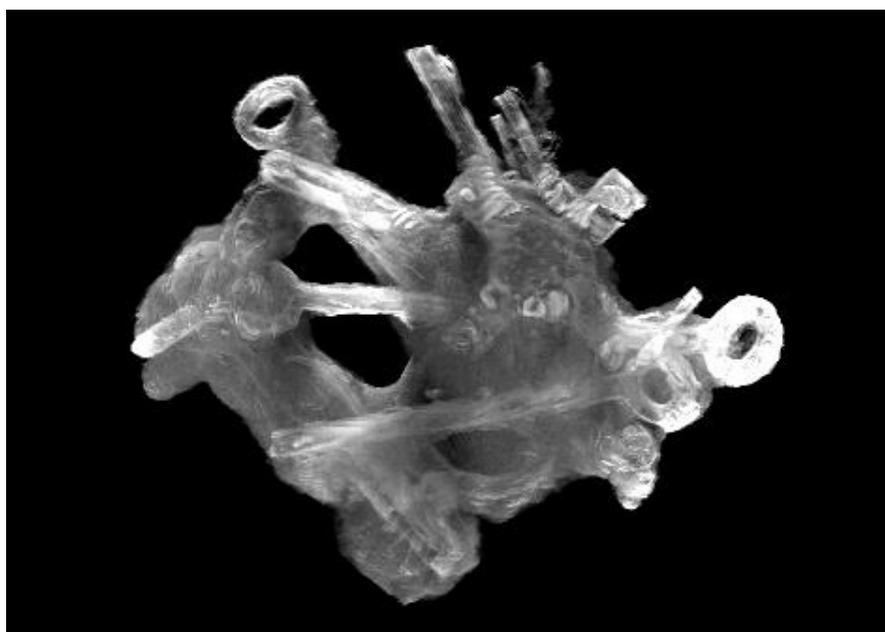
当館の文化財用 X線 CT スキャナ

調査成果：

皆見大塚古墳から出土した鉄製品を X線 CT スキャナで調査した結果、馬具であることが確認されました。

鉄塊状の資料を X線 CT スキャナで撮影すると、引手・兵庫鎖・吊金具などが確認されました。遺物は相互に連結しており、それらが折り重なるようにして出土した様子を見ることができます。

（文化財調査室 小林啓）



皆見大塚古墳出土馬具の X線 CT 像

主な遺跡の時代：古墳時代後期

古墳の内容：皿山古墳群は、福岡県と大分県の境となる山国川やまくにがわの氾濫作用により形成された河岸段丘上かがんだんきゅうに位置しています。

I 区では丘陵の南側、標高約 40～55mの斜面に古墳を 5 基築造していました。5 基の古墳は大小様々ですが、すべて円墳で主体部は南に向かって開口する横穴式石室です。古墳は全て盗掘されていましたが、石室や周溝の中からは須恵器などの土器をはじめ、金箔きんぱくを貼った馬具や鉄刀、耳環じかん、ガラス玉などが出土しました。

中でも最も標高が高く見晴らしのよい場所に築造された 1 号墳は、周溝を含めた直径が約 26m、高さが最大で 5m もある大型円墳で、この地域の首長クラスの墓であると考えられます。この古墳の開口部西側の墳丘からは、大量の須恵器が出土し、一部は並べられたままの状態が残っていました。これらの土器は古墳に遺体を埋葬する際に、この場で祭祀さいしを行った痕跡と考えられます。このように大がかりな祭祀が行われたことから、この古墳の被葬者が位の高い人であったことがわかります。

(学芸調査室 齋部麻

矢)



皿山古墳群 I 区 1 号墳墳丘出土の須恵器群

X線CTスキャナの調査成果②

皿山古墳群

X線CTスキャナの特徴：

当館のX線CTスキャナは紙資料、木彫、土器、陶磁器、金属製品など当館で調査研究、展示される多くの資料を調査することができます。

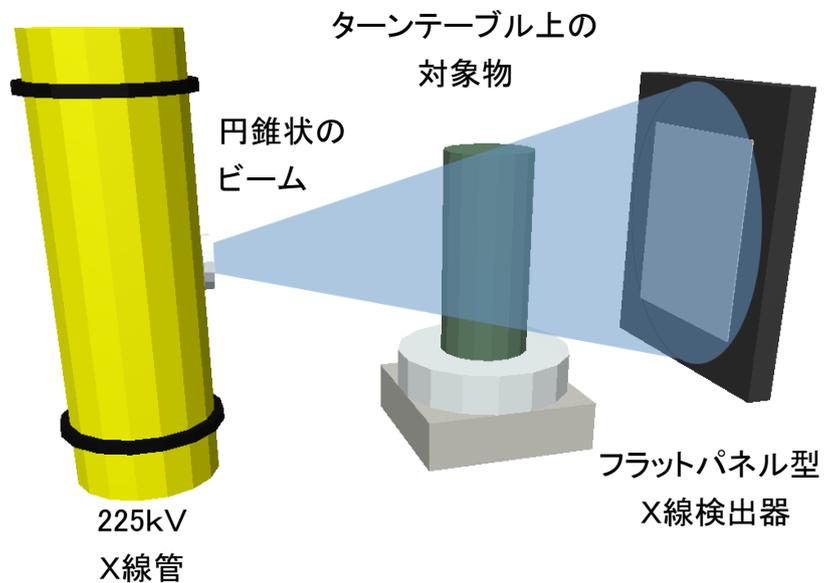
当館の文化財用X線CTスキャナは、病院などで使用されている一般的な医療用X線CTスキャナに対し、約2倍の出力で透過し、約10倍の高精密で三次元立体像を構築することができます。得られた立体画像や断面画像から文化財の内部構造や製作技法、劣化状態、修理履歴を非破壊、非接触で調査・研究することができます。

調査成果：

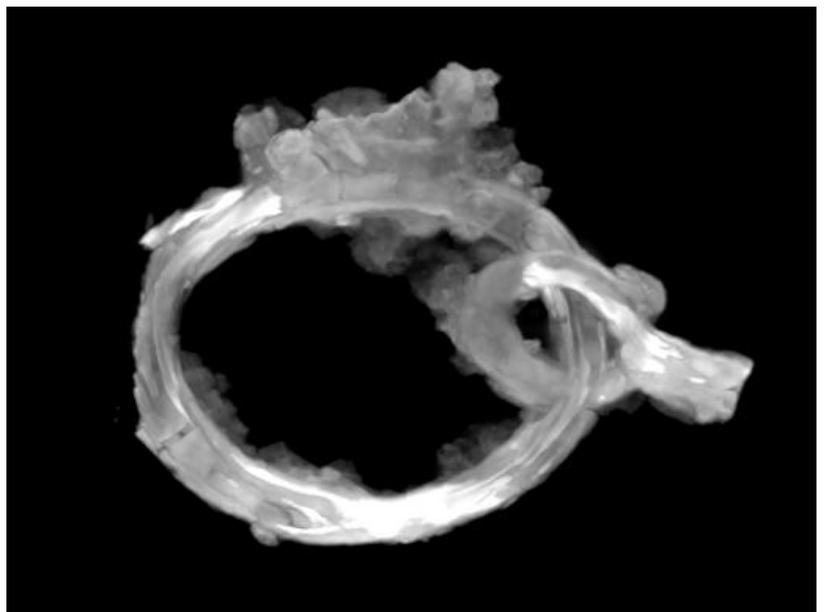
皿山古墳群から出土した馬具をX線CTスキャナで調査した結果、錆に覆われた内部の構造を詳細に確認することができました。

写真は馬具の鏡板と引手のX線CT像です。環状鏡板に引手が連結している様子がよく分かります。革帯を取り付ける立間と呼ばれる部分の直下には円形の穴が一箇所開けられています。

(文化財調査室 小林啓)



X線CTスキャナの概念図



皿山古墳群出土馬具のX線CT像

再整理事業

福岡県教育委員会では、昭和 22 年に発掘調査が行われるようになって以来、パンケースで約 4 万箱の資料を収蔵保管しています。このうち 20 年以上前の出土品の一部や寄贈品のなかにもどこから出土したかの記録が失われたものがありました。

再整理事業は、これらの不明遺物を発掘調査報告書と照合したり、文書記録を調べて正しく収蔵する作業です。

この作業により、所在不明になっていたものが見つかったり、出土した遺跡名がわからなかった貴重な資料の帰属が判明し、展示にも利用できるようになりました。

(文化財調査室 秦憲二)



出土地不明の小型ハソウ



出土地不明の円形刻文をもつ円筒埴輪片



出土地不明石製鋳型



昭和 49 年調査朝倉市堤鬼迫 1 号墳出土須恵器蓋

収蔵庫の再発掘

のぶなが 延永ヤヨミ園遺跡（中・近世）

ゆくはし よしぐに
行橋市吉国

遺跡の概要：延永ヤヨミ園遺跡は弥生～古墳時代にかけての県下でも屈指の規模をもつ集落遺跡です。古代の「津」に関わるもののみでなく、それ以降の遺構も数多く発見されています。

中世後期から近世初頭（概ね15～17世紀初め頃）にかけて、丘陵全域に屋敷を区画したと思われる溝が縦横に掘削されています。幅約3m、深さ約1.5m程の溝が大規模なものですが、その内部にあるはずの建物跡は残念ながらはっきりしません。



溝と同じ頃の今一つ注目すべき遺構に数基の「地下式土坑」と呼ぶ「あなぐら」のような地下室があります。地下倉庫あるいは墓などといった諸説があって、その性格ははっきりしていません。

この遺跡では、2基の地下式土坑から柱材・板材が出土しました。地下室の補強あるいは利用に供されたものと思われます。

また、地下水が滞水していたために重機で内部をさらえたところ、あしやがま芦屋釜と思われる鉄製茶釜、ねんぶつこう念仏講などで使用する双盤（そうばん一對の鉦）などが回収され、地下で茶をた点て、あるいは念仏をとな唱えたりしていた可能性が浮上しました。

（参事 飛野博文）

地下室の謎

ほかまち 保加町遺跡

やながわ ほかまち
柳川市保加町

主な遺跡の時代：江戸時代（前期～後期）

遺跡の概要：

保加町遺跡は柳川城下町の北の入口である井出橋の向かい側に位置する町屋跡です。城下町絵図では間口が狭く、奥行の長い建物が立ち並んだ町屋が描かれていますが、その通りに細長い礎石建物跡と側溝が発見されました。この建物跡は安永9年(1780)の火災の痕跡の層の下から検出されたので、18世紀前葉から中葉のものとなりました。

その建物跡の下約1mほどの深さでは掘立柱建物跡だけで構成される建物跡群が検出されており、町が発展して行く様子がうかがえます。

(文化財調査室 秦 憲二)



安永の外町大火の焼土層（赤く焼けた土と炭の層）



18世紀前葉から中葉の礎石建物跡群



17世紀中葉から後葉の掘立柱建物跡群

柳川城下町最北端の町

のぶなが その 延永ヤヨミ園遺跡（中世）

ゆくはし のぶなが・よしくに
行橋市延永・吉国

底部を除いてほぼ完全な形に復元できた常滑焼が埋められたような状態で出土しました。常滑焼は現在の愛知県で焼かれた、豊臣秀吉の朝鮮出兵に由来しない、古墳時代の須恵器の伝統を受け継いだ陶器です。一般的に上半部に自然釉が掛かり、釉のない外面は赤系統に発色します。

新しい時期には口縁部断面が「N字形」になると形容されますが、これは12世紀代の古い段階のものです。



常滑焼出土状況



備前焼出土状況

常滑焼出土地点から随分離れたところで、割って捨てられたような状態で備前焼の甕が出土しましたが、これもほぼ完全な形に復元できました。

備前焼も常滑焼と同じく須恵器の伝統を引く陶器です。14~15世紀の備前焼は口縁部を玉縁とする点が特徴的です。

どうしてここまで徹底的に割る必要があったのか、その理由は思いつきません。

これは「土師器」ではなく、「陶器」でもない、「瓦質土器」と呼んでいる軟質の焼き物です。割れ口は白っぽく、内外面は本来黒色に近かったものと思われます。

形は備前焼をまねたようであり、体部はほぼ全面に「須恵器」のような格子叩き痕（外面）と同心円文当具痕（内面）が残っています。

地面に埋め込まれていましたが、どのように利用していたものかわかりません。

（参事 飛野博文）



瓦質土器大甕出土状況

遠くから運ばれてきた中世陶器

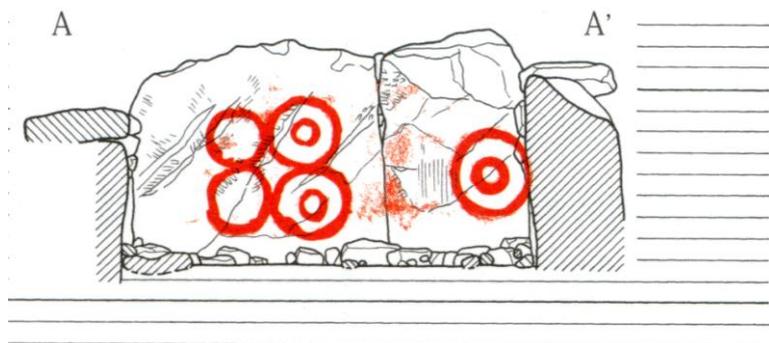
装飾図の概要：装飾は全体的に不鮮明ですが、肉眼ではっきりと観察できた色は赤色顔料（ベンガラ）と黒色顔料（不明）です。壁画が施された場所は玄室左右袖石、玄室左右側壁、玄室奥壁、玄門天井石、前門右袖石背面、前室左側壁の一部だけです。確認できた文様は、三角文 13 点以上、円文 3 点、同心円文 3 点と三角文を意識した X 字状文が赤色で描かれていました。



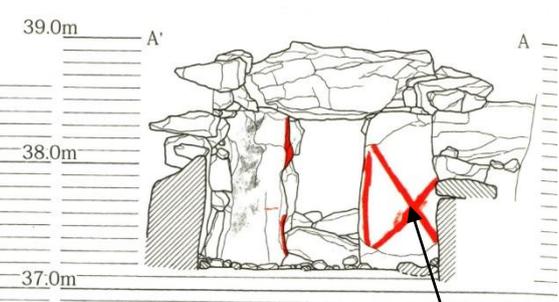
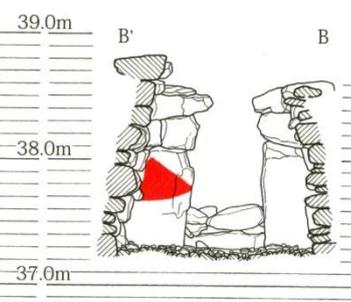
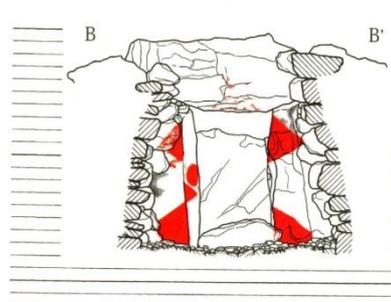
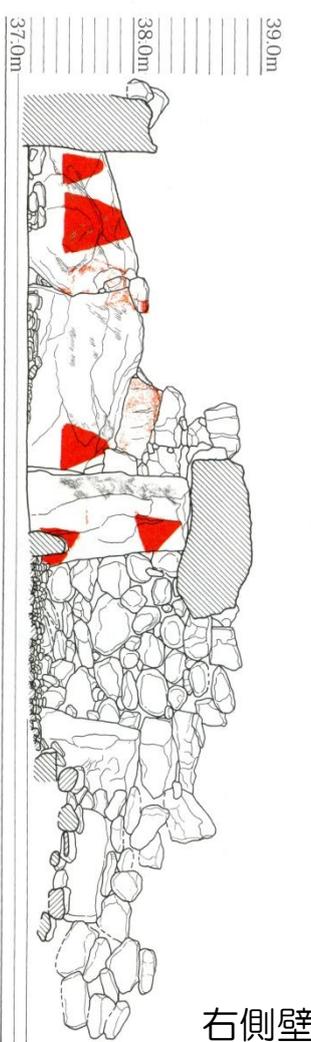
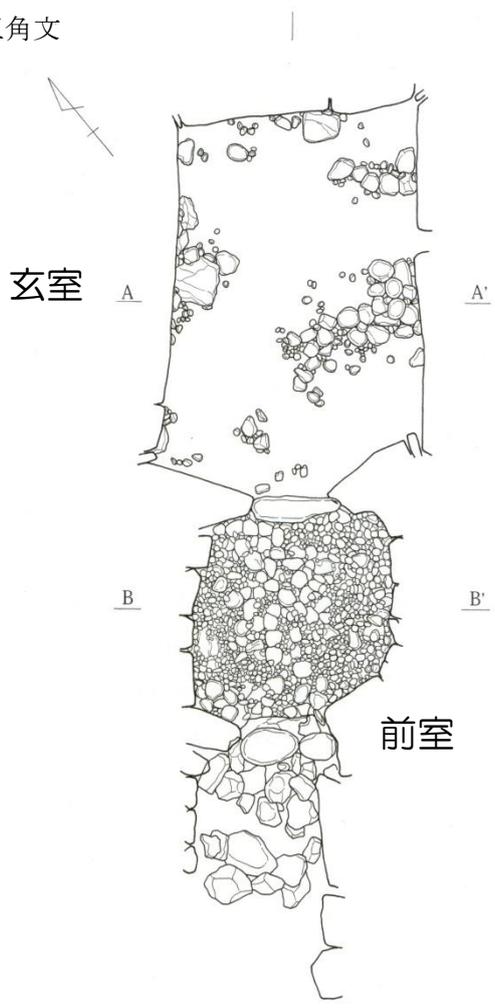
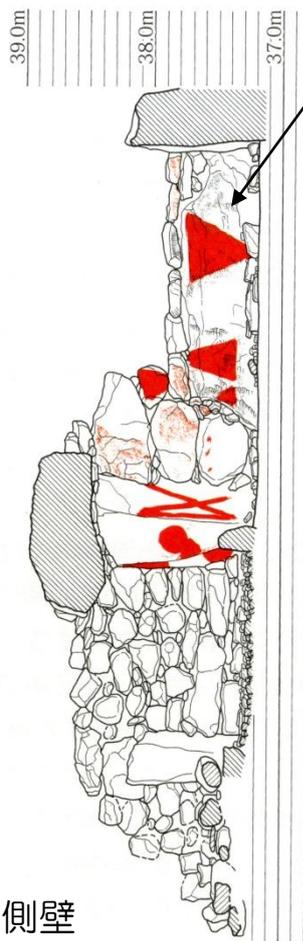
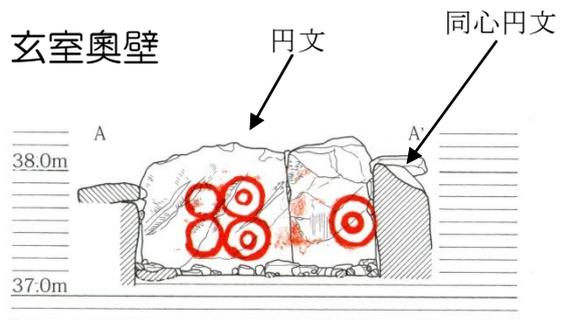
玄室左側壁

装飾の特長：玄室の奥壁に円文や同心円文などを描く文様構成は、うきは市日ノ岡古墳に通じるものがあり、筑後川流域の装飾古墳の影響を受けている可能性があります。

（文化財調査室 坂本真一）



玄室奥壁壁画推定復元図



皆見大塚古墳 裝飾壁画推定復元図

あざみ

皆見大塚古墳の埋め戻し保存

古墳の埋め戻し保存の概要：皆見大塚古墳はその重要性から、高速道路の橋梁きょうりょうの下に保存することになりましたが、古墳の上で行う橋梁工事の影響を避けるために、石室を埋め戻すことになりました。

埋め戻すにあたって、装飾壁画を保護するために以下の方法を行いました。

まず装飾のある壁面に、カビの発生を防ぐためのアルコールを散布しました。



壁面を保護するために、耐久性の高いポリオレフィン系シートという特殊な防水シートおおで覆いました。



③そのシートの上に
発泡ウレタンを吹き
付けて固定しました。



最後に石室内部を
どのう土嚢で埋め戻し、古
墳全体は真まさ砂土で埋
め戻しました。

⑤現在の皆見大塚古墳

現在も古墳は埋め戻したままなので、石室内部を見学することはできませんが、写真のような状態はいつでも見ることが出来ます。



(文化財調査室 坂本真一)

やまぐち

山口古墳群

みやこ かんた やまぐち
京都郡苅田町山口

主な遺跡の時代：古墳時代（後期）

遺跡の概要：



古墳群全景

墳丘内の祭祀の痕跡も下層遺構も検出されませんでした。墳丘下から弥生土器が1点出土していることから、古墳築造時に弥生時代の遺跡を破壊した可能性があります。

（文化財調査室 秦）



12号墳墳丘撤去状況

む
古墳の墳丘剥いちゃいました

ガサメキ古墳群

ちくじょう こうげ しもとうばる
築上郡上毛町下唐原

主な遺跡の時代：古墳時代

遺跡の内容：遺跡は、山国川左岸の丘陵の斜面に立地しており、本古墳群ではこれまで10基の古墳の調査が行われています。

いずれも直径10mほどの小さな円形の古墳（^{えんぼん}円墳）で、石を組んだ石室に死者を追加して埋葬できるように入口を設けた横穴式石室です。

石室の中からは葬られた人物が身に付けていた銀メッキされた耳環や、鉄剣・鉄刀・鉄鏃な

どの武器、馬の^{くつわ}轡のほか、石室の中や入口に供えられていた^{まつ}祀り用の須恵器や土師器が出土しました。馬具のなかには金メッキされたものもあり、小さなムラの有力者の姿が復元できる成果といえます。

また、発掘調査では古墳をつくる工法の一部がわかりました。石室の石を積みながら単純に土を盛っていくのではなく、古墳の周囲に石や土のうを円形に並べて土手状に土でかためてから内側のくぼみを土で埋めるといった作業を三度くりかえし、最後に土で全体を覆って完成させています。これは古墳が雨などで崩れないようにするための古代人の工夫です。（文化財調査室 吉村靖徳）



ガサメキ古墳群遠景



古墳の盛り土の中に埋めこまれた石列

小型古墳の主は武器を持ち、馬に乗っていた

主な遺跡の時代：古墳時代後期（6 世紀後半）

古墳の内容：

皿山古墳群は、上毛郡上毛町に所在する 6 世紀後半代に作られた墳墓群です。今回 7 基の古墳を調査しましたが、そのうち特に大きな古墳が I 区 1 号墳で、直径約 22m の円墳で、高さが 3.5~5.5m あります。盗掘されていたため出土資料はほとんどありませんが、金メッキの馬具や耳環じかんがあったり、墳丘上で大々的な祭祀さいしが行われたらしく、有力者の墓だと考えられます。

また、墳丘の作り方を調べるために断ち割ったところ、どのように土を積んで作られたのかがわかりました。

構築方法には以下の 3 つ工夫が見られました。

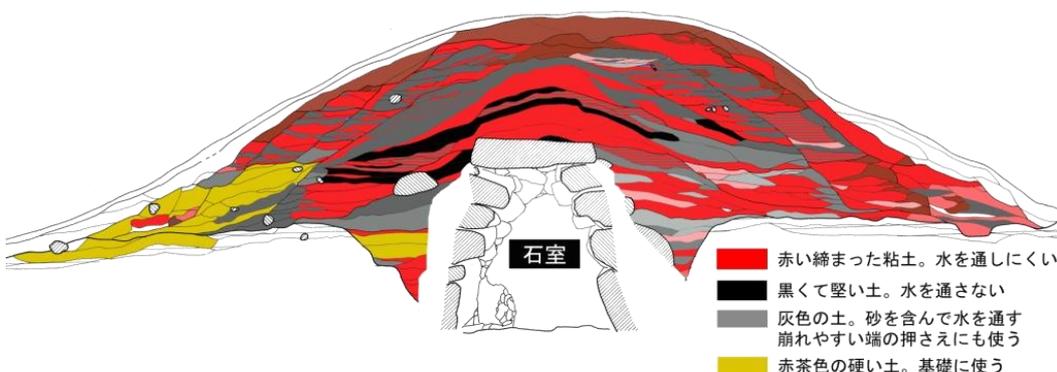
- ①墳丘が高いので、崩れないように、粘土・砂・固い土を丁寧に重ねて固める工夫
- ②墳丘内に水が溜たまらないように、浸入した水が抜ける工夫
- ③崩れやすい部分に石や土の塊を置いて抑える工夫



③の石や土の塊で押さえる工夫は、畿内の古墳に多く見られる工法です。このことから、この地域が畿内、つまり大和政権と何らかの関係があったことが考えられます。

墳丘断ち割り時の「富士山」のような土層の様子

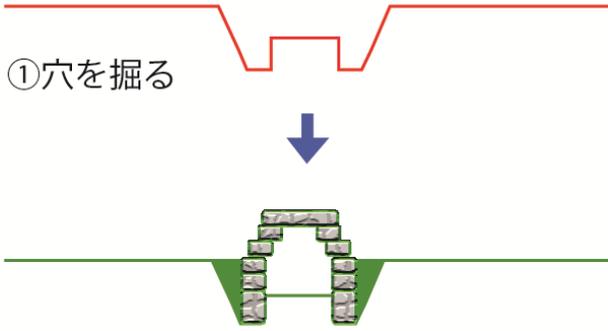
(学芸調査室 齋部麻矢)



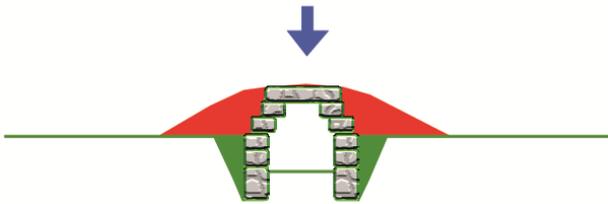
墳丘に使われた土の性格の色分け図（断面図）

畿内の大和政権と繋つながる有力者の墓？

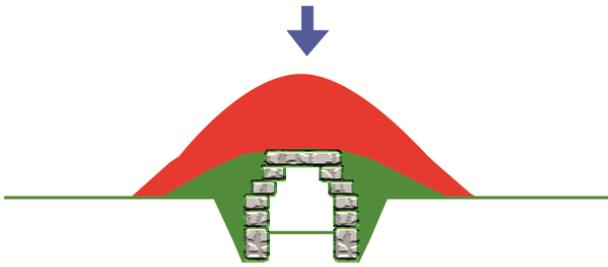
①穴を掘る



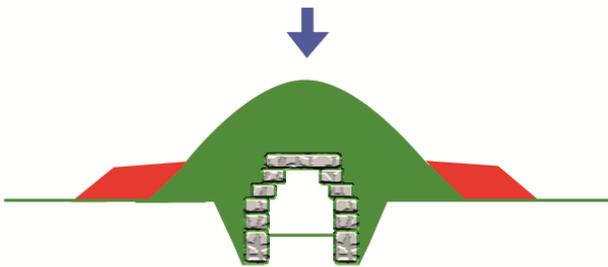
②石を組んで石室を作る



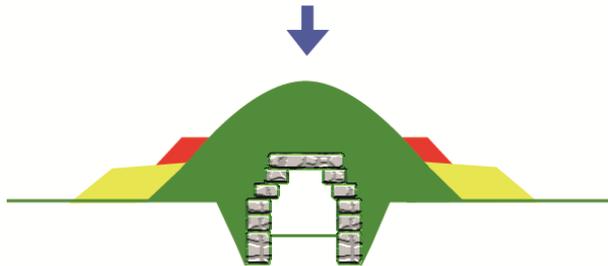
③石室の周りを固める



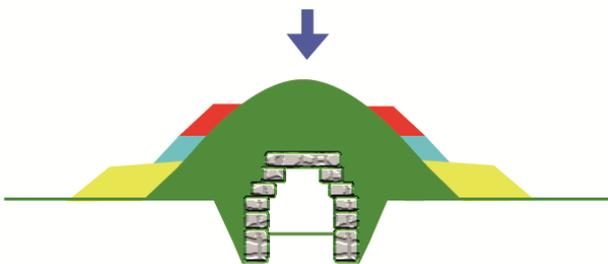
④上に土を積んで小さな墳丘を作る



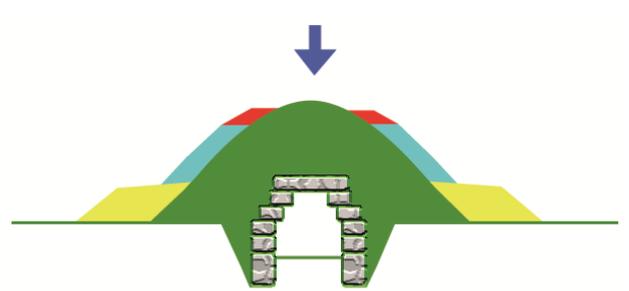
⑤小さな墳丘の周りに土を積む



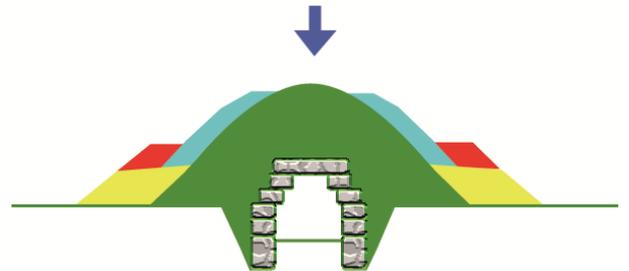
⑥小さな墳丘の周りに土を積む



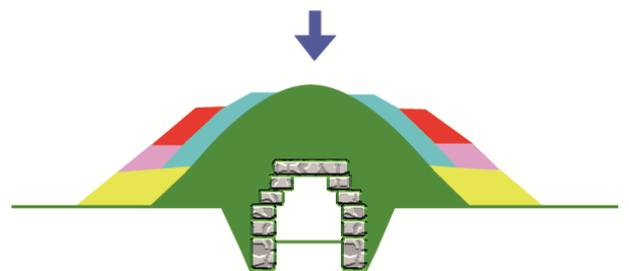
⑦更に上に土を積む



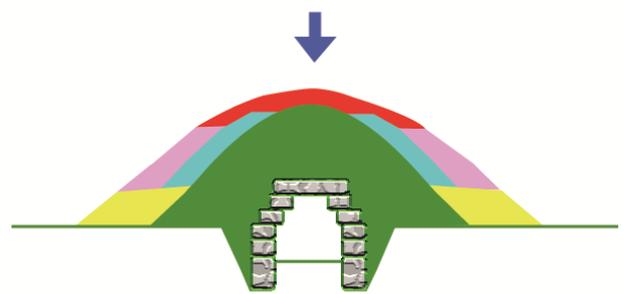
⑧一回り大きくなった!



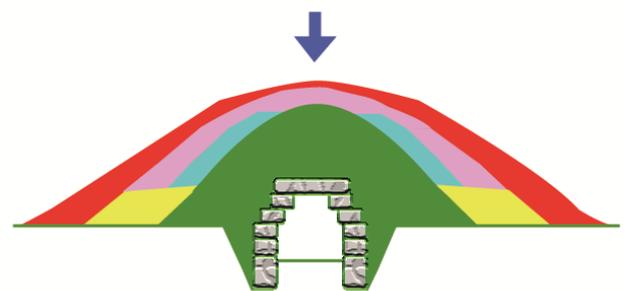
⑨またその外側に土を積む



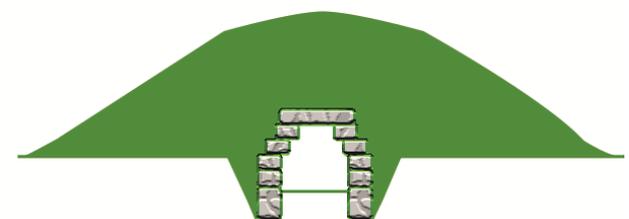
⑩更に上に土を積む



⑪更に一回り大きくなった!



⑫最後に全体を粘土で覆って



完成!

さらやま

皿山古墳群（弥生時代）

ちくじょう こうげ しもとうばる
築上郡上毛町下唐原

遺跡の概要：古墳の墳丘を取り去った下から、弥生時代中期から後期の竪穴住居跡 10 軒や掘立柱建物跡 3 棟、甕棺墓・土壇墓各 1 基などの小規模な集落跡が発見されました。古墳の造成の際に大きく削られたらしく、古墳の墳丘の中には弥生土器や石庖丁などの石器が入っていました。



墳丘下の弥生時代集落跡（左）と墳丘撤去前の古墳群（右）

土坑と竪穴住居跡からは炭化したドングリ（イチイガシ）が多数発見され、6号土坑からは最も多く 2,393 点が出土しました。稲作は行われていたものの、縄文時代以来利用されていた堅果類がいぜんとして重要な食料だったことがわかります。

（文化財調査室 秦憲二）



小さな黒い粒は炭化したイチイガシ

古墳の下に弥生時代の集落跡発見！

それはいつのもの!?

弥生時代の遺構からは炭化したイチイガシというドングリが多く出土しました。

生物は生命活動をしていると体内に自然界に一定程度存在する「放射性炭素 C14」という物質が取り込まれます。この C14 は、生物の死後は新たな C14 が取り込まれなくなるうえに、時間の経過とともに C14 は通常の「炭素 C12」という物質に変化するために生物の遺骸から失われていくという性質を持っています。従って、生物の遺骸に残る C14 の量を測定することで、その生物の遺骸が何年前のものかわかります。

この方法で、皿山古墳群 I 区の弥生時代中期の 12 号土坑から出土したイチイガシを測定してみました。すると、紀元前 41 年～紀元 56 年(2 σ の暦年代: 1990 \pm 20 年 BP)という測定値が出て、今から約 2000 年前のドングリとわかりました。

※数字に幅があるのは、測定年代には誤差が出るためで、この方法では何年と特定することはできません。そのため、測定結果はその年代幅の中に入る確率が高い数値で示されます。

皿山古墳群の炭化種実
・土坑15b



1 イチイガシ子葉

2 イチイガシ子葉



9 イチイガシ子葉

どうしてやめちゃったの？

石室掘り方状遺構

皿山古墳群では古墳の脇に石室の石を据えるために掘ったと思われる痕跡が見つかりました。古墳を造る時の最初の工程なので、古墳を造ろうとしてやめたようです。



コの字形なのは石室の側壁と奥壁の腰石になる巨石を据えるためか

石材出土土坑

石室に使う巨石が入った大穴が発見されました。

地面から頭を出していた石を石室に使おうとして掘り始めまして途中でやめたのか、あるいはどこからか運んできた巨石を古墳に使わなかったため穴を掘って埋めたものです。



石材出土土坑

これらの遺構は古墳造りの様子を生々しく伝えています。

ちおんじ 知恩寺跡

たがわ そえだ そえだ
田川郡添田町大字添田

主な遺跡の時代：中世～近世

遺跡の概要： 知恩寺跡は、
ひこさん
英彦山の北にある独立峰である、
がんじゃくさん
岩石山の南西麓にある寺院跡で
す。

岩石山には、豊臣秀吉が九州平
定の際に秋月氏一党と戦った激
戦地として知られる、岩石城があ
ります。

知恩寺は、今は移転しています
が、もとは秋月方で参戦した佐々
木平左衛門という武士が、この戦
いで討ち死にした兵の菩提を弔
うため、仏門に帰依してこの地に
開いた寺と伝えられます。

調査の結果、近世の建物跡・池跡
が見つかりました。これらは、江
戸時代の知恩寺を構成する施設で
あったと考えられます。

また、中世にさかのぼる建物跡
も出土し、寺院が作られる前より、
集落が営まれていたことがわかり
ました。

珍しい出土遺物には、鉄製の茶
釜や、木製のコマなどがあります。
いずれも近世のものと思われま
す。

(学芸調査室 小澤佳憲)



近世の建物跡と池跡



鉄製の鋳物茶釜

がんじゃくじょう とむら
岩石城の戦いの死者を弔う寺跡

主な遺跡の時代：中世末～近世

遺跡の概要：大村湯福遺跡は、
くにみやま 国見山(637.8m)から北東に
延びる丘陵の先端部付近の東
麓に立地します。

この付近は鈴木谷と呼ばれ、
天平12年(740)の藤原^{ひろつぐ}広嗣の
乱にも関わった地元の有力者
^{かみつけ} (上毛郡擬大領)、^{ぎたいりょう} 紀宇麻呂^{きのうまる}の
屋敷があったとの伝承が残っ
ていましたが、調査の結果では
中世末～江戸時代の屋敷跡の
一部かと思われる遺構と遺物
が見つかりました。

今回の調査では、井戸跡と考
えられるものを含む土坑(大き
な穴)10基以上と溝4条など
の遺構を検出し、15世紀から
18世紀前半頃までの土器、陶
磁器などが出土していること
から、屋敷地の一部と考えられ
ます。

この地は現在まで宅地とし
て利用されてきましたが、戦国
時代から江戸時代前半の頃
にはすでに人々の生活の場とな
っていたようです。

(文化財調査室 小川泰樹)



大村湯福遺跡東半部



1～3号溝

戦国時代以来の高級住宅地？

しもいらはらげじがはらいせき 下伊良原下地ヶ原遺跡

みやこ さいがわしもいらはら
京都郡みやこ町犀川下伊良原

主な遺跡の時代：縄文時代、鎌倉～江戸時代、現代

遺跡の内容：遺跡は、^{はらい}祓川左岸の狭い谷筋の傾斜面に立地します。

本遺跡は鎌倉時代から江戸時代、現代にかけての集落と墓地です。

集落の痕跡は、掘立柱建物跡や人為的に掘り込んで壁が焼けた穴などが、川に近い緩やかな斜面から見つかります。祓川に流れ込む小川には石を並べていて、谷を渡る道とも考えられ、魚を捕るための網につけられた土錘（おもり）もたくさん出土しました。

谷を見下ろす高い場所につくられた墓地は江戸時代から現代のもので、平成22年に多数の五輪等や墓石の調査を行ないましたが、その下部の今回の調査では鎌倉時代の五輪塔が墓の台座として再利用されているほかは改葬のために墓石を投げ込んだ大きな穴や、江戸時代の銅銭やキセルが供えられている墓穴が確認できたただけでした。



昭和期の炭窯



ダムに沈んでしまう下伊良原遺跡の全景。写真左は祓川。



掘立柱建物跡
(柱の位置に人が立っている)

この遺跡からは縄文時代早期の土器片も発見されており、古い時代から狩猟を行いながらこの地で生活を営んでいたことがわかります。また、木を焼いて炭をつくる昭和期の炭窯が二基見つかりました。天井は炭を取り出したときに崩されていますが、石を組み上げ粘土を貼った壁や床は熱を受けて堅くなっています。こうした遺構はこの地域の生業を知る上でも貴重なものです。

(文化財調査室 吉村靖徳)

鎌倉～江戸時代の山間の集落と墓地

つしまふくいち 津島福市遺跡

ちくご つしま ふくいち
筑後市津島字福市

主な遺跡の時代：縄文時代早期、弥生時代前期末～中期初、江戸時代～

遺跡の概要：遺跡はJR筑後ちくご船小屋駅ふなごやの北東側に位置します。遺構は土坑 5 基、溝 7 条と南東側では谷を検出しました。縄文時代早期の風倒木痕である5号土坑からは押型文土器おしがたもんや石器が出土しました。1号土坑からは弥生時代前期末～中期初の甕棺片や甕が出土しました。

江戸時代の遺構は2～4号溝があります。2・4号溝は浅く、底面には凹凸痕跡があることから道路跡の可能性がありま。またやや深い3号溝は2・4号溝と東西方向に平行に延びていることから側溝の可能性がありま。す。

今回、弥生時代前期末～中期初頃の甕棺や土器が出土しました。復元した結果、残念ながら甕棺は完全な形状にはなりませんでした。

第3展示室（有料）には甕棺や土器を展示中です。ぜひご覧ください。

（文化財調査室 坂本真一）



津島福市遺跡全景写真



1号土坑土器出土状況

しもいらはらたかぎじんじゃ

下伊良原高木神社跡（中世～近世）

みやこ

京都郡みやこ町犀川下伊良原

さいがわしもいらはら

高木神社は、明治の初めまでは大行事社と呼ばれていて、9世紀前半に彦山靈仙寺（18世紀初め以降は英彦山）の周囲の領内に48社が祀られたといわれています。下伊良原高木神社もその一つで、13世紀の初め頃に対岸から遷されたといわれていますが、その頃の鍋形土器がかなり出土していて伝承の信憑性が高まりました。ですが、その当時の建物跡はわかっていません。

右の写真は神社解体直前の境内の様子です。



上の写真の中央付近の前端に現社殿に置かれた狛犬の南側の台座が残っていますが、その北側に右の写真のように2つの長方形の掘込みがあって、内部に礫が乱雑に入っていました。それらを除去するとそれぞれ東（前）端に直径0.8～1.0mの巨石が平坦な面を上にして置かれていました。巨石は鳥居の礎石だろうと考えています。これに対応する石段の一部も見つかっていて、改築前の境内の一部を窺うことができました。



左は神社に関連する遺構の全体です。礎石・切石を用いた石垣は現社殿のもので、川原石や自然礫を使用した石垣・石列は埋もれていたもので、造られた時代ははっきりしませんが、江戸時代でも後半以降のものと思われる。

なお、写真上方の白っぽく見える部分は風化した岩盤で、本来は山を形成していた部分、赤く見える部分がその裾でした。



（参事 飛野博文）

彦山神領 48 社の一つ

カワラケ田遺跡 2次調査

みやこ 京都郡みやこ町 皆見 あざみ

主な遺跡の時代：江戸時代

遺跡の概要：



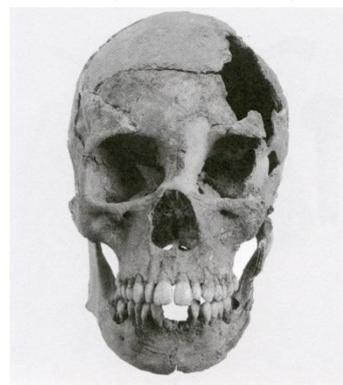
2号近世墓 人骨出土状況

お墓から人骨が発見された場合、体のどの部分の骨がどのような向きで出土しているかを観察することで、遺体をどのように埋葬していたのかを知ることができます。例えば、上の写真では、骨が残っていない部分もありますが、頭を左側に向けていること、肘を曲げて手を顔の近くに置いていること、下肢は膝を曲げた“体育座り”のような姿勢であることなどがわかります。このような観察の積み重ねによって、カワラケ田遺跡では、遺体を仰向けもしくは横向きの膝を曲げた姿勢で木棺に入れ、埋葬していたことが明らかになりました。

調査後の人骨の観察と分析から、それぞれの人の性別・年齢や病歴、墓地に葬られた人々の顔貌の特徴などを知ることができます。カワラケ田遺跡には、少なくとも大人の男性が7体、大人の女性が4体埋葬されていたことや、3-4歳の子どもから60歳以上の大人まで幅広い年齢の人々が埋葬されていたことがわかりました。

また、写真のように頭蓋骨が復元できた女性個体の分析から、頭の形の特徴が、福岡市博多区や筑紫野市で発見された同じ時代の人骨よりも、大分県竹田市や日田市の江戸時代の人々に比較的近いということが明らかになりました。

埋葬の方法や人骨の形質的特徴は地域によって異なりますし、江戸時代のように身分制度がはっきりした社会では、亡くなった人の身分によっても違いがあります。今後、江戸時代のお墓の調査例が増加すれば、カワラケ田遺跡でみられた特徴がどのような意味を持つのかが明らかになるかもしれません。



7-1号人骨頭蓋骨

(文化財調査室 岩橋由季)

江戸時代のお墓

「発掘速報展 2015」調査報告会

日時：平成 27 年 8 月 29 日（土）

13:30～16:00（受付は 13:00 から）

場所：九州歴史資料館 2階研修室

内容：展示される遺跡のうち、重要な発見があった 3 遺跡について、調査担当者がその成果をわかりやすく紹介します。

◎下伊良原高木神社遺跡

神社跡の下から縄文遺跡発見！

九州歴史資料館参事 飛野博文

◎水城跡

100 年ぶりの土塁断面の調査

福岡県文化財保護課 杉原敏之

◎展示資料の科学的調査

九州歴史資料館文化財調査室 小林 啓

申し込み方法

- ①はがきの場合：参加希望者の住所・氏名（ふりがな）・電話番号・FAX番号・調査報告会受講希望と記入し、九州歴史資料館宛に申込みください（8月27日当日必着）。
- ②FAXの場合：下の用紙に必要事項を記入し、九州歴史資料館宛に申込みください。
- ③直接当館でお申込みの場合：受付にて申込用紙に記入してください。
- ④電子申請での申し込み→パソコンからは、インターネットによる申し込みが便利です。当館HPをご覧ください（HP：<http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/>）。
- ※ 定員になり次第締め切ります。なお、電話での受け付けはしていません。
- [ご注意！！]
- はがき・FAX・直接当館でお申込みいただいた方には、受け済みの連絡は行いません。定員に達し、締め切った場合にのみ連絡します。受付確認を希望される方は、往復はがき及び電子申請でお申込みください。



九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3

電話 0942-75-9575 FAX 0942-75-7834

入館時間／9:30～16:30（入館は 16:00 まで）

休館日／月曜、ただし月曜が祝日の場合はその翌日が休館日

観覧料／無料（但し第 1・3 展示室は有料）

交通機関／西鉄三国が丘駅徒歩約 12 分、

JR 原田駅からタクシー約 5 分